

デイドロの人間観

白 土 美 登 里

ドニ・デイドロ(Denis Diderot)は、一七二三年にフランスのラングルに生れ、一七八四年六十九才で没している。華麗な栄光を世界に誇った、太陽王ルイ十四世は、デイドロの生れた翌年死に、一七八九年のフランス革命は、彼の死後五年をへて起ったのである。

ルイ十四世時代を頂点とする、アンシャン・レヂーム(旧体制)の特徴は、宗教と王権が結びついた、強固な身分制であった。

国王は、地上における神の代表者として絶対権をもち、王をめぐる第一身分の僧侶、第二身分の貴族達は、納税を免ぜられる等の特権に守られていた。残る一般国民即ち第三身分は、農民、手工業者、商人等であったが、その中でも特権的な階層が存在した。例えば職業ごとの同業組合がそれで、ここでは親方が絶対権をふるいえたのである。

第三身分のうちでも、ブルジョワジーの少数の上層部のものは、国家から間接税の徴収を請負って百パーセント以上の利益をあげていたといわれる。彼ら徴税請負人たちのサロンは啓蒙思想家の温床となり、その中からエルヴェンユウスや、ラヴォワジエのような学者もでた。

絶体主義体制下のフランス農民は、王権の強力が貴族を押えていたため、東欧やイギリスに比べて比較的自由であり、総耕地の三〇〇四〇パーセントの土地を所有した。しかし、少数の豊かな農民のほかは、過少農と土地を持たない農民の数が多く、この農民たちがどうやら生活できたのは、農村共同体のためである。だが、十八世紀末ごろから、王権の権威がゆるむにつれ、貴族達は、自分達の領主的特権を復活強化する一方、共同地から農民をしめ出し、困いこみをつくって、イギリス風の農業経営を行おうとしたのである。これは、富農には発展の機会ともなったが、下層農民は窮迫し、浮浪人となって都会に流れ込む者もふえ、あるいは各地で暴動を起すともなった。

戦争は、いつも新たな課税の理由となったが、殊に一七四一年と四八年に至る、オーストリー王位継承戦の不名誉な敗北は、国内的には財政危機を招き、対外的には植民地を失い、不利な通商条約を結ぶ等、国民に大きな不満をよび起したのである。革命が近づくにつれ、農民が三部会議に提出した陳情書の一つには次のようにのべられている。

「私は悲惨です。何故なら人々があまりにも多く私から取り上げるからです。人々は私からなぜ多く取り過ぎるかという、それは特権者から多くを取らないからです。特権者は彼らに代って私に税を支払わせるだけでなく、彼ら自身も彼らの教会的権利と、封建的権利による上前をはねるのです。私の収入百フランのうち、五三フランを収税吏に払ったのち、十四フラン以上を貴族に支払い、同じく十四フラン以上を教会税に支払わねばなりません。そして残った十八乃至十九フランで、私は、地下のねずみ（酒税吏と塩税吏）に満足を与えねばなりません。」(Faine L'ancien régime t. II p. 267)

第三身分の中核をなすものは、前述の上層ブルジョワジーのもとに、これと対抗しつつ成長してきた新興ブルジョワジーであった。十六世紀ごろから、王立マヌファクチュールとして出発した、フランスのマヌファクチュールは、生産力が増大し、技術が進歩するにつれて、かつての恩恵者ルイ王朝の行う統制が、今はその成長の桎梏となって

いたのである。

又、国内関税、通行税、入市税等は、商業資本家の自由な活動を妨害していたが、それにもかかわらず、一七一六年から一七八九年までの間に外国貿易は四倍に上昇し、生産力の発展は、一七三〇年頃から急激に増大していた。彼らの不満は、革命後、一貴族による回想に次のように書かれている。

「パリその他の大都市においては、ブルジョワジーは、富、才能、個人的業績において、貴族よりも優れていた。地方の都市においても、地方貴族を同様に凌駕していた。彼らはこの優越を感じていた。しかし彼らは到る処で軽視された。軍事令によって、彼らは軍隊勤務から除外されていた。又、司教は上級貴族から選ばれることになってから、僧職からも除外されていたわけである。司法官の職も彼らを拒絶した。宮廷官の大部分は、貴族のみをその仲間に入れた。」(H. Sée. op. cit. p. 166.)

ブルジョワジーの経済的な力が充実するにつれて、アンシャンレヂームの社会的なひずみ、利害の対立矛盾が、ルイ王朝の失政によって拍車をかけられるのであるが、この新たな事態は、既成の思想では処理できないものであった。第三身分は、新しい指導原理を求め、権利の完全なる平等、一切の官職の万人への解放、選挙権の平等化、貿易の自由、荘園経済の徹廃等を要求する方向へとむかったのであり、それにこたえたのがフランスの啓蒙思想家たちである。イギリスから帰国したヴォルテールが、パスカル批判にはじまる啓蒙ののろしをあげたのは、一七二八年からである。彼は、名誉革命以後のイギリスの民主主義政体、とくに議会の性格を、独特の筆法で紹介していたが（一七三四年）、何よりも大きな功績は、ロックとニュートンの学説を、分りやすく解説したことである（一七三八年）。それ以来人々は、理性と科学的成果にもとづかない理論は、展開しにくくなったのである。

「行動せず、自己を静観すると仮定される人間とは、一体どんな人間であろうか。……」

人間は行動のために生れたのである。それは丁度、火が上に向い、石が下に向うと同じ理である。活動しないことと、存在しないこと、この二つは同一の事柄である。」(Remarques sur les pensés de M. Pascal, Oeuvres complètes, 1824, t. 43 p. 38)

ヴォルテールは、彼の人間観をこのようにのべているが、これこそ、彼を先頭として立ちあらわれた、一群の啓蒙思想家を端的に表現するものであった。

十七世紀の特異な思想家として、むしろ十八世紀的とみられるほど、教会の矛盾を巧みに批判したピエール・ベイルでさえ、十八世紀の思想家とはもう違っていたのである。エミール・フアージェは次のように言う。

「要するに彼(ピエール・ベイル)は文筆家であって、文筆家以外の何ものでもない。

ところが十八世紀の思想家達は、殆んどそうではなかったといえる。彼らもまた文筆は取った。然し彼らはもつと別のことを考えていた。彼らは自分達が行動の為に、同胞への直接的な働きかけの為に、生れてきたことを確信していた人々であり、彼らの世紀をどこかに導いて行こうと意図した人々であった。」(Emile Faguet, Dixhuitième siècle, p. 8)

数代続いた刃物師の家柄であるディドロの生家は、終生熱心なカトリック教徒であり、彼自身も教会僧を志望し、ジェスイットの学校を卒業、一七三二年にはパリのダルクール学院を卒業している。父は彼を何かの職業に就かせたいと望んだが、彼の向学心は父からの送金をことわって、その後十年間貧しい書生生活を送らせた。一七四二年にはルッソーと会い、ルッソーからコンディヤックを紹介されている。

一七四五年の終り頃、パリの有名な書店主ル・ブルトンから、英人チェンバースのエンサイクロペディアの翻訳を

依頼されるが、それよりもっと優れた内容のものを、自分達の手で達成することを考えたディドロは、書店主と契約し、翌四六年大法官を説得し出版権を獲得した。

「すべてあの古くさい、ばかげきった考えを踏みじり、理性を基盤としないような知識をくつがえし、科学と芸術（「技術」とに、それらにとってあのように貴重な、自由をとりもどしてやらねばならぬ」と、やがて項目『百科全書』に書き入れるディドロは、科学アカデミーの会員として天才的数学者であるダランベールに協力をたのみ、彼は又、ジョフラン夫人、デュ・デファン夫人のサロンの名士たちにディドロを紹介した。かくてヴォルテール、フォントネル、モンテスキュー、ビュフォン等当代きっての知識人達が、次々と協力することになったのである。

「百科全書」が完成するまでには三〇年の月日を要し、一八四人の執筆者が筆をとり、五千人の予約者が仕事を支えた。それはかつてない規模をもち啓蒙思想のとりどころとなって、全フランスにひろがったのである。

この『百科全書』の特色は、執筆者の世代は十代から七十代にわたり、身分は、僧侶十四人、貴族三十五人、を含んで各身分を網羅するが、職業は、官吏、医師、軍人、工場主、職人、弁護士、印刷師、時計師、地図師、徴税請負人、博物館長、学校経営者、建築家、獣医、探険家——の実行派（九十八人）と、学会会員、著述家、教授、僧侶、編集者、王室史料編集官、劇作家、詩人——の机上派（六十七人）の配分にみられるように、実際的な知識の提供を目的として、イデオロギー、身分、年代の相違等にとらわれず、実務に従事している専門家に、その項目をかかせたことである。この仕事によって、各々自分の専門分野にとじこもりがちな、技術者、科学者、職業家の体験的知識を、社会にとって有用な、進歩の方向に向けてひき出し、結び合せ、又当時のいわゆる進歩的な思想家達は殆んどが、そこにタッチして、実務家と思想家、官学派と民学派が力を合せ、近代思想を作りあげる大事業となったのである。だが完成までの経過は多難であった。

一七四九年には、デイドロ自身が秘密出版をした、『哲学随想』『盲人書簡』『不謹慎な宝石』『白い鳥』に関して、一〇二日間投獄される。一七五二年、第一巻が出版されると、ジエスイット派から、無信仰と盗用についての攻撃。

執筆中の僧侶二人への圧迫により、二人の国外への亡命。第二巻発行直後配布停止、原稿差し押え。これらは、出版業監督長官マルゼルブや、ルイ十五世の寵愛の深いポンパドール夫人の運動等によって切りぬけ、再び続刊の運びとなる。一七五八年、ルッソーが『ダランベールへの手紙』を書いて袂別。つづいて、ダランベール、デュクロ、マルモンテルなどが仕事の危険さを恐れて脱退。エルヴェシュウスの『精神論』が発禁になったのみでなく、一七五九年には『百科全書』自身が出版権をとりあげられ、合法出版は終わる。デイドロは妙案を出して図版の出版という形に切りかえる。そしてローマ法王の断罪、更に、出版の完成間際になって、書店主ブルトンが当局を恐れて、ひそかに内容を骨ぬきにした書替え、削除等、相つぐ難関を切りぬけての三十年であった。

幾多の迂余曲折がありながらも、『百科全書』の仕事は、フランスのほとんどの啓蒙思想家を結びつけ、人間の理性と善意へのゆるぎない信念をもって、科学と技術に基礎をおきつつ、自由、平等、寛容を要求する人間主義をうちたてたのである。そのヒューマニズムは、当然の傾向として、思想と行動の自由を圧迫する、絶対主義の権威への批判となり、王権の権威と結びついた教会の権威の不寛容、腐敗、そして護教の名のもとに人間を殺して恥じない矛盾への批判となった。宗教観としては、あくまでも理性に基ずく理神論が主流となり、哲学は神秘主義をしりぞけ、イギリス経験論の影響のもとに、実証主義、合理主義の立場に立ち、現実の人生の幸福こそ哲学の課題とされたのである。人間を無限に完成可能なものと考える一方、民衆化、平均化をねがったフランス啓蒙思想は、中世以来のフランス文化の栄光に支えられ全ヨーロッパに急速に侵透して行つたのである。

その中でデイドロの果たした役割は大きかったが、彼ほど毀誉褒貶の多い啓蒙思想家も珍しいであろう。多才で精力

的なディドロは、百科全書のほか相当数の著作をなし、政治、経済はもとより芸術論まで手をのばしている。生涯を通じて体系的なものを嫌った彼が、天才の奔放さにまかせ、対話体などの形式で書きまくったのであるから評価がむずかしく、まちまちになるのも無理はないと思われる。だがそれも、思想的にはみのりの少い機械的唯物論にすぎなかったとするもの、時代の制約の中にあつて、彼自身は弁証法を意識しなかったが、彼の思考は本質的に弁証法的であつたとみるもの。の二つの見方に大別されよう。

ここでは彼の宗教観とか認識論とかの個々のものについてではなく、ディドロの考え方、生き方の根底にあるもの、フランス革命前夜の、いわば変革期の哲学、変革期の天才として、今日もなお問題になるものにしぼってみたい。

「人間は、そこから出発し、またいっさいをそこに帰着させなければならぬところの唯一の項（数学用語の項）である……私の存在と、私の隣人の幸福を除外して、自然のその他のものが私に何のかかわりがあるか？」（全集第一四卷四五三頁）

「一人の人間を動因から動因へと追いつめてみたまえ。すると諸君は彼の個人的幸福が、つねに彼の反省されたいっさいの行為の最終目的であることを発見するであろう。」（百科全書『目的』の項、全集第一五卷一〇頁）

「唯一の責務がある。それは幸福であるという責務である。私の自然の、打ち勝ちがたい、譲渡できない傾向は幸福でありたいということであるから、それは私のもろもろの真の責務の源泉、唯一の源泉である。」（ディドロとエカテリーナ二世三二二頁）

まずディドロは、人間及び人間社会の目的を『私及び隣人の幸福』という一点にしぼってしまう。真理の追求、科学及び技術の開拓、宗教、道徳、政治、経済、芸術等、問題の分野がどのように変ろうとも、それはディドロにとつ

て、『私及び隣人の幸福』という唯一の目的へのいのちの躍動にほかならない。

「人間は〔宗教の説いている〕報いにたいする期待であるとか、罰にたいする恐れといったような、卑俗で奴隸的な動機なしに、自己のいつさいの情念を人類の全体的な幸福に協力することに強制する場合に、十全ないし有徳なのである。」（全集第一卷一三頁）

「われわれを行動に向けて決心させるところのものは、精神の一般的行動ではなくて、心のなかに現存しているものもろの情念である。」（『彗星に関する随想』第二三三章）

それにもかかわらず当時の教会の教義は、情念を罪深いものとして扱っていた。不当に低く評価されてきた『人間』に品位をとりもどし、『情念』と『理性』とをその目的に向けて伸ばさせねばならない。それがデイドロの宗教批判の基調であった。

「ある現象が、われわれからみて人力を越えているとしましょう。するとわれわれはすぐに、『それは神わざ』だといえます。われわれの虚栄心はなまなかなことでは満足しないのです。われわれはもう少し言葉から自尊心をへらし、もう少し哲学をふやすことはできないものでしょうか？もし自然が、解くことのむずかしい結び目をわれわれに示したら、それを分らないものとしておこうではありませんか。その結び目を断ち切るために、ある存在の手を用いないようにしようではありませんか。その存在はあとになって、あなたにとって最初のもの以上に解けない結び目になりますよ。インド人に向けてなぜ世界は空中にぶらさがっているかきいてごらん下さい。彼は、世界は一匹の象の背に乗っていると答えるでしょう。では象は何の背中でそれを支えているかと問えば、亀の背中で、と答えるでしょう。では亀は誰が支えているのか？……このイドン人をあなたは憐れなやつだと思いいなるでしょう。そこでひとはあなたに向けて、彼〔インド人〕にいうように、こういうことができましょう。『ホルムスさん、まずあなたの無知

を告白なさい。そして象と亀を引っ張り出すことは勘弁して下さい』と。……この世界とは一体何ものです。ホルムスさん、破壊へのたえざる傾向を示すさまざまな変革を閲する一つの合成物です。あとからあとからとつづき、おしあいへしあいし、やがて消滅してゆく存在のめまぐるしい継続であり、つかのまの均衡であり、一瞬の秩序です……。世界はあなたにとっては永遠です。あたかもあなたが一瞬間しか生きていない生物にとって永遠であるように。」
(全集第一卷一二九頁)

では、真実はどのようにして認識されるかという点、

「事物たるところのものとわれわれの判断とが合致すること。」(百科全書『真理』の項)
であり、認識の対象は事実以外の何ものでもない。

「事実はそれがどんな性質のものであれ、哲学者の真の宝庫である。」(全集第二卷一六九頁)
それにもかかわらず、これまでの哲学者達及び科学者の一部の人は、

「自然に鑑みるよりも自己に鑑みるほうが易くもあり、簡単でもある。」(全集断片第一〇) ために、事実への探究をおろそかにしていた。

「事物がわれわれの悟性のなかにあるにすぎない間は、それはわれわれの意見である。それは真実でもまた誤謬でもありうる意見であり、承認された観念でもまた異議を唱えられる観念でもありうる。それは外部の存在と結合することによって初めて確実さを獲得する。この結合あるいは実験の不断の連鎖によって、あるいは一方の端においては観察に、一方の端においては実験に結ばれている推理の不断の連鎖によって、あるいはまたその両端に吊された長い糸の上にかかったいくつかの錘のように、推理のあいだにあらゆる散らばっている実験の連鎖によってなされる。」(全集第二卷一六三頁)

「われわれは三つの主要な手段をもっている。自然の観察、反省、実験がこれである。観察は事実を集める。反省はそれを結合する。実験は結合の結果の真偽を検討する。……」

実験は条件の細部のため、また限界を知るため反復されなければならない。実験を各種の対象に移行させ、複雑化し、ありとあらゆる可能な方法で結合してみる必要がある。実験がちりぢりばらばらで孤立し、連絡がなく、簡約しえない間は、簡約されえないこと自体によって、まだなすべきことが証明される。その時はただその対象にとりつき、現象の一つが与えられれば他の現象もまた与えられるまで、いわばその対象を拷問にかけねばならない。まずもろもろの結果を簡約することに努め、それからもろもろの原因を簡約することを考えよう。ところが結果は、それを増加することによってのみ簡約されるのである。」(全集同上二六七頁一八五頁)

事実を認識する場合、実験を各種の対象に移行させ、複雑化し、ありとあらゆる方法で結合してみる必要があるとデイドロが指適したことは、大変重要なことである。

つまり、ああもできれば、こうもできるといふ、実験、実践の多様化は、認識の多様化であり、これこそが絶対だといふ、固定化し、体系化した『真理』をしりぞけたのである。

認識の多様性の問題は、人間の主体性の問題、自由の問題、天才の問題、したがって与えられた材料を組み上げ、組み替える「思想」の重要性、それ故にまたその危険性をもつく問題であった。

「一部の哲学者〔実験哲学者〕科学者〕はどうやらたくさんさんの道具を持っているが思想に乏しく、他の哲学者〔いわゆる哲学者〕はたくさんさんの思想を持っているが、道具をもたない。真実にたいする関心は、ものを考えるものが行動するものに、ついには結合することを要求するであろう。」(全集第二卷五九頁)

しかも、その結合の仕方は、『真理』というものをでき上った体系の結論のなかにではなく、探究のプロセスのな

かにあるとみるディドロは、「哲学者的思索」のなかで次のように書いている。

「ひとは私に真理を探究することを求むべきであって、それを発見することを求むべきではない。」（全集第一巻二九頁）

「哲学を民衆的なものにすることを急ごう。もし哲学者が前進することをわれわれが欲するなら、民衆を哲学者たちのいる点に近づけよう。哲学者たちは、普通の精神の所有者の理解できるところまでもってこることのできない著述があるというであろうか？ もし彼らがそういうならば、彼らはよい方法と長い間の習慣がなしうるところを知らないことを示しているだけであろう。」（全集第二巻一八三頁）

これまでの形而上哲学が、体系のものものしさにも拘わらず、動いている事実から遠ざかり、現実の把握が困難になり、民衆の役には立たなくなっている現状を、鋭く追求したディドロは、いわゆるフランス唯物論グループの、機械論的な思索の硬化にも、同じく鋭いほこ先を向けた。彼にとっては、事実にもとずかない思考、絶えず変化してゆくものへの柔軟性を失った思考は、致命的と考えられたのである。エルヴェシュウスに対して、「この誤った結論は普通、事柄をあまりにも一般化しすぎたことからだけ生じたもの……」といい、又、

「本書はあまりにも方法的である。これが本書の主要な欠陥だ。というのは、第一に、方法はそれが手段である場合、興ざめさせ、おもおもしろくし、速度をにぶらせる。第二に、それはすべてから自由と天才の風貌を奪い去ってしまふ。第三に、それは理屈の様相をおびる。……のみならず方法という道具だては、建物が出来上ったあとまで取り残されている足場に似ている。それは作業には必要なものではあるが、仕事が終わった時には目についてはならないものである。それはあまりにも冷ややかな、あまりにも自分自身を統御しすぎる精神を示すものである。創造的な精神は無軌道に騒ぎ立ち、運動し、動くものだ。それは探究する。方法的精神は整頓し、秩序立て、いつさいが発見され

たと仮定する。……これが本書の主要欠陥だ。」(全集第二卷二七二―八頁)

「……私はこうした一般論にどうもがまんがならない。私は人間であり、人間に特有な原因が私にはなければならぬ……」(全集第一三卷一四五頁)

人間が、できあいの論理の枠にはめこまれてよいはずがない。「もろもろの経験は人間が至るところにおいて同一であることを証明している」といつたエルヴエシユウスに対してデイドロは強く反撥する。

「……もし何らかの社会において、一人の人間は他の人間と本質的に同じ値打ちを持っているという意味だとすれば、それは誤りである。

人間という言葉の定義と才智ある人間という言葉の定義とは同じではないし、またどんな定義も二つの観念を含んでいるから——その一つはもつとも近い類概念であり、他は特有性、あるいは本質的な相違である。——才智ある人間は本質的に人間一般とは異っている。

人間が獣とちがうのと同じくらい本質的に異っている。」(全集第二卷三六五頁)

「各人はそれぞれ自己流の利害(幸福)を持っており、そのつよさは各人において、彼の性質が多様なのにくらべてもそれに劣らないほど種々様々なものだ。」(エルヴエシユウス反駁全集第二卷二四二頁)

十八世紀の啓蒙思想は、とかく人間を一般化し、各人の特殊性、多様性を捨象しがちであったから、天才を普通人と差別しては扱わない風潮であった。その中でデイドロは、天才が社会に対してもつ価値を何度も強調したのである。彼は、人間のもつヴァラエティが、一般論や一つの概念のローラーでひきならされるのに耐えられなかった。特に『稀にしかあらわれない天才』が、思想の名のもとにそのような無残なめにあうのを黙ってみすごしはできなかった。人間尊重のすぢみちを、普通人の多業性は多様性のままに、又、天才の偉大さも埋没させられないように配慮した彼

が、決定論をぬけだそうと努力し、人間をして人間たらしめる『自由』を渴望したのは当然のことであった。

「その〔自由〕の本質は、勘考の対象の明瞭な知識を包含するところの理解のなかにある。

われわれが自ら決定する場合の自発性と、偶発性すなわち論理的ないし形而上学的必然性の排除のうちにあつて、理解は自由の魂であり、それ以外のことはそのからだであり、基底である。自由な実体は自分自ら決定する。」(全集第一五卷五〇七頁)

「自由を取り除いてみよ。全人間性は転倒され、社会にはどんな秩序の根跡もないことになるであろう、もし人間にして、彼のなす善いこと悪いことにおいて自由でないとすれば、善はもはや善ではなく、悪はもはや悪ではない。もし不可避的で不可抗的な一つの必然性が、われわれの欲しているいつさいのことをばわれわれをして欲せしめるとすれば、われわれの意志はもはや、機械のバネが機械に与えられる運動にたいして責任がないのと同様に、われわれの意欲について責任がないであろう。」(全集第一五卷五〇二頁)

デイドロの提出した「自由」の内容は、十九世紀をへて、今日でもなお新鮮さを失わない重要な問題である。デイドロは、人間の自由をより多く左右できる政治形態については次のような態度をとる。

「恣意的な政府はどんな政府でもすべて悪いものです。私は善良で、確信にみち、正しく、啓蒙された君主の恣意的な政府もその例外とはいいたしません。

この君主は〔人民〕にどんな君主でも尊敬し、愛する習慣をつけます。この君主は国民から、討議し、欲し、あるいは欲せず、反対し、善いことでも反対する時には反対するという権利をとりあげます。

反対権は、私の見るところでは、人間社会において、自然で、譲渡できない、神聖な権利であります。

専制君主は、彼が人間のなかで最良の人間であっても、自分の好みにしたがって治めることによって、一つの大罪

を犯しているのです。彼はよき牧者ですが、臣民を動物の状態に還元してしまいます。一旦失ったら取り戻すことのむずかしい自由の感情を彼らに忘れさせることによって、彼は臣民に十年の幸福を得させるでしょうが、臣民はその幸福を二十世紀にも及ぶ大きな不幸によって支払うことになりました。

ある自由な国民に生じうる最大の不幸の一つは、正しく、啓蒙された専制政治が二代か三代つづくことではありません。エリザベス女王のような君主が三代つづいたら、イギリス人は知らず知らずのうちに奴隷状態に導かれ、それがいつまでつづくかわかりません。

たとえ根拠薄弱なものであっても、自由の影さえも残っていない人民は不幸なるかな！ であります。こうした国民は快い眠りに落ちていてのですが、それは死の眠りであります。（『デイドロとエカテリーナ二世一四三頁』）

良政というものも、世の人によって考え出された良きものを、ただ与えられる形であるならば、国民はいつのまにか最も大切なものを失ってしまう。自分自身の理性と情念を働かせて新しく何かを作り出すための『自由』をうばわれてしまうのだ。『自由』のないところには、例え良き政治による国民の快適な眠りはあっても、その『人間性』は死の眠りにつく。それは決して真の幸福な姿ではない。デイドロが、『私及び隣人の幸福』という時には、与えられた、平均化された幸福とか、人間生活の向上だけではなしに、まさに個々人が一般人も天才も一人一人のかけがえない情念と理性とにおいて、つむぎ出した幸福以外は、考えられていなかったのである。人間を一般的に市民、人民と一括して把握しその啓蒙、それへの政治、経済、宗教等が論じられた思想的風潮の中で、デイドロの思想は人間へのより深いヒューマニズムに貫かれていたといえよう。そして百科全書の編集期間を通じて、

「考えられるかぎりの迫害で私の受けなかったものは何一つとしてありませんでした。」
と述懐したデイドロであるにもかかわらず、次のように言うのである。

「人間社会の全調和は、つぎの一般的で単純な原理に立脚している。すなわち私は幸福でありたいと思う。しかし私は、私のようにそれぞれ幸福でありたいと思っている人びととともに生きていく。彼らの幸福を得させながら、あるいは少くともけつしてそれを害することなく、われわれの幸福を手に入れる方法を探究しよう。われわれはこの原則がわれわれの心に刻まれているのを見る……。社会性〔ひとの幸福に対して配慮するという人間の性質〕から、それを源として、社会のいつさいの法律、他人にたいするわれわれの一般的及び特殊的義務が流れ出る。これが人間のいつさいの英知の基礎であり、純自然的ないつさいの美德の源であり、全道徳並びに全市民的社会の一般原則である。」〔全集第一七卷二三三―四頁〕

多才多作であったディドロの作品は、もつと様々な方面からの扱いができるであろうが、ここでは私は、あえて以上の点にしぼって見たかったのである。それは、今、私達が、ディドロの時代にもまして啓蒙の必要な時代——啓蒙期に在ると思われるからである。

ディドロの没後、私達は十九世紀から二十世紀現代にかけての歴史をもつている。

その激動の波をくぐって、ディドロの知らなかった多くの要素が、人間及び人間の社会と歴史に加ってきた。しかし、天才の洞察は、人間の基本的な問題については、時代の制限を越えて、今日もなお新しい。又は、今日だからこそ改めて、問題となる条件が出て来たともいえよう。

原爆の投下によって大戦が終結したことは、民族、国家、階級の差別なく、『平和』というものが何にもまして必要なものとなり、原水爆の使用は、避けねばならない至上命令となった。その意味での『平和』を、すべてのものに優先して守らねばならないほど、科学の破壊力が発達した時に、私達は、意識するとしなやかにかかわらず、新しい

時代を迎え入れたのである。

しかもそれは、破壊力ばかりを連んできたのではない。科学の各分野、技術の各分野に、爆発的な発展をもたらしたのであり、将来へむけて、ますます連鎖反応を起す可能性をもたらしたのである。それは当然、近い将来に人類史をそこから両断するほどの、生産力の飛躍的増進を約束する。

人類を破滅におとし入れる破壊力と、どんな人も、「豊かで幸福な暮し」ができる物質的可能性をあわせ持った時、「彼らの幸福を得させながら、あるいは少くとも、決してそれを害することなく、われわれの幸福を手に入れる方法を探究しよう。」

というデイドロの悲願が、実現の可能性をもち始めるのである。

このような時代の門口に立って、私達のなすべきことは、時代の内包する力、そのもつ諸矛盾に、考えられるかぎりの方面からとり組み、解決の方法や可能性を、多様に取り出すこと、更にそれを啓蒙の波にのせて宣伝しつつ、人類の総力をあげて、最も犠牲少なく新しい時代を創り出すことであろう。

この場合、そこに密着し、そこから学びとり、そこで確かめてみなければならぬ対象は『現実』以外にはなく、主体は当然『自分』であり、既成のイデオロギーや世界観の手を借りるものであってはならないと思う。デイドロの指適をまつまでもなく、どのような権威をほこる思想体系であろうとも既成のものでは間にあわなくなってこそ変革期なのであり、それを自覚するところに思想の意義があるのである。かつてなき変革を内包している事実そのものの中から、素材を汲みとり、組みあげて行くより方法がないのではあるまいか。

そしてその時、その思考の柔軟性、したがってヒューマニズムの深さが、その思考を現実性のあるもの、変革をになうにふさわしいものへとつくりあげて行くのであろう。

しかし、現実の世界は、まさに世界観の争い、イデオロギーの争いといつても過言でなく、その世界観のものと体制の違いは、少々の不都合があろうともおいそれと変更できる現状ではない。

そこで私は、「われわれはもう少し言葉から自尊心をへらし、もう少し哲学をふやすことはできないものでしょうか？」というディドロの言葉を思い出すのである。

自然科学の探究でさえ、色々な認識の仕方が考えられると言われるが、それよりも更に複雑で、人為的な変化を起し易い『人間社会』への認識は、自然科学以上の柔軟性多様性が要求されよう。殊に、政治の分野にはいればはいるほど、それを動かす個人の能力、個性の影響が強くなるので「これが真理だ」とか、「絶対の正義」だとかと潜称すべきではないことは、歴史の証明するところである。しかもその認識が当を得たものかどうかを実験するには、相当の年月を要し、時には不当な犠牲をさえともなうのである。

各自の体制、各自の世界観のもとでの建設は、どのような錦のみ旗をかかげようとも、人類にとつて、今の時点では、等しく実験場であり、その成功も、そのひずみも、新しい時代を建てるための認識及び実践の多様化にはかならない。世界観のちがいはあろうとも、各自の立場での実験の価値をみとめ合い、話し合い、とり入れ合う、自由と寛容の精神が、何よりも必要なではあるまいか。又、実際には、右左にきしみながらもその方向にむかっているのが世界の大勢であろう。そのような意味において今日は、まさしく啓蒙の時代であり、哲学が、思考のするとき、広さ、しなやかさを要求される時と思うのである。

そして今の時代からふり返るとき、具体的な諸問題については、多くの限界がありながらも、基本的な課題については、ディドロは、啓蒙期の天才的思想家と呼ぶにふさわしい人といえるのではなからうか。

